

歯科口腔外科

1. 臨床医学教育の現状と評価

(1) 臨床医学教育の目標

- 1) 「徳」を持ち「情」と「知」を併せ持つ
- 2) 観察力、洞察力を持ち科学的思考を身につける
- 3) 確実な知識に裏づけられた技術教育

(2) 医員、医員（研修医）の現状と研修実績

1) 初期研修医の現状について

a. 研修実績について（対象期間：平成9年度～12年度）

入局者数と本院での研修期間（月数：平均値）

年 度	9年度	10年度	11年度	12年度
入局者数	3人	2人	4人	3人
研修期間	12ヶ月	12ヶ月	12ヶ月	12ヶ月

b. ローテート方式研修の実績

平成9年度：0人

平成10年度：0人

平成11年度：0人

平成12年度：0人

2) 医員の受入れ状況（対象期間：平成9年度～12年度）

年 度	9年度	10年度	11年度	12年度
採用者数	4人	5人	5人	5人

(3) 指導体制について

教官と経験のある医員、研修医の体制

半年毎のローテーション（外来・病棟）、非検討

抄読会での発表、2年間の研修プランによる課題と修得の点検

(4) 研修の評価について

2年間の研修プランに基づいて担当教官が年2回checkする

(5) 関連研修施設の現状

1) 健和会大手町病院 2) 上天草総合病院 3) 大分県立病院 4) 東国東広域病院

(6) 臨床教授

なし

(7) 認定医・専門医・指導医の取得状況（平成9年度～12年度）

1) 認定医・専門医・指導医等の取得状況

- a. 日本口腔外科学会／認定医5名、指導医2名
- b. 日本形成外科学会／認定医1名
- c. 日本顎関節学会／認定医1名、指導医1名

(8) 学会認定施設の状況

- 1) 日本口腔外科学会
- 2) 日本顎関節学会

※今後の課題と改善策

- ・受験資格の取得と早期の認定医試験の受験

2. 臨床医学研究の現状と評価

(1) 臨床医学研究の目標

口腔機能の維持と回復
顔面形態の修復・改善
口腔ケア技術の流布

(2) 研究スタッフ

教授 1名、助教授 1名、講師 2名、助手 2名
実験助手（非常勤職員を含む） 0名
事務職員（非常勤職員を含む） 1名

(3) 研究領域と研究課題（対象期間：平成9年度～12年度）

主な研究課題名

- 1) 骨延長による下顎再建
- 2) 唇顎に蓋裂発現の予防と葉酸摂取
- 3) 口腔白板症発生とマイコプラズマ感染の関連について
- 4) 口腔癌の転移に関する研究ならびに化学療法効果の予測に関する研究
- 5) 顎変形症

(4) 博士（医学）の学位の取得状況（平成9年度～12年度）

年 度	9年度	10年度	11年度	12年度
取得者数	1名	2名	1名	2名

(5) 学会、研究会活動（シンポジウム、特別講演、学会役職等）

年 度	9年度	10年度	11年度	12年度
学会発表 (国際)	2回	2回	4回	1回
(国内)	7回	19回	20回	25回
(地方)	2回	4回	4回	2回
(司会・座長)	6回	7回	7回	7回
シンポジウム特別講演等				
(国際)	0回	0回	0回	1回
(国内)	0回	1回	1回	1回
(地方)	2回	1回	1回	1回
(司会・座長)	0回	1回	1回	1回

学会役職（評議員、理事等）（平成9年度－平成12年度）	
日本口腔腫瘍学会	柳澤繁孝（理事）
日本口腔外科学会	柳澤繁孝（評議員）
日本口腔科学会	柳澤繁孝（評議員）
日本口蓋裂学会	柳澤繁孝（評議員）
日本小児口腔外科学会	柳澤繁孝（評議員）
日本歯科薬物療法学会	柳澤繁孝（評議員）
日本レーザー歯学会	柳澤繁孝、水城春美（評議員）
九州口腔癌TS研究会	柳澤繁孝（代表世話人）

（6）研究論文（英文、和文）（平成9年度－12年度）

- 1) Yuushi MATSUMOTO, Seiji KATO, Masahiro MIURA, Shigetaka YANAGISAWA, Masatsugu SHIMIZU : Fine structure and distribution of lymphatic vessels in the human dental pulp: a study using an enzyme-histochemical method, Cell & Tissue Research, 288 : 79-85, 1997.
- 2) Yoshihiro TAKAHASHI, Rintaro MATSUSHIMA, Masatsugu SHIMIZU, Iwao NAKAYAMA : Immunohistochemical Study of Copper-zinc Superoxide Dismutase and Glutathione S-Transferase- π in Oral Precancerous Lesions and Squamous Cell Carcinoma, 日本口腔腫瘍学会誌, 9 (4) : 251-260, 1997.
- 3) ETO Kazuo, YANAGISAWA Shigetaka, SHIMIZU Masatsugu, HATAJI Akira : Development and clinical application of a new occlusal force measurement apparatus-wave forms and FFT power spectrum analysis, Pathophysiology, 4 : 249-257, 1998.
- 4) Y. MATSUMOTO, K. KATO, G. TACHIBANA, M. MIURA, S. YANAGISAWA : Visualization of the lymphatic vascular system in the human dental pulp, LYMPHOLOGY, 31 (suppl.) : 83-85, 1998.
- 5) Yoshikuni FUKUYAMA, Satoshi YOSHIDA, Shigetaka YANAGISAWA, Masatsugu SHIMIZU : A Study on the Differences Between Oral Squamous Cell Carcinomas and Normal Oral Mucosae Measured by Fourier Transform Infrared Spectroscopy, Biospectroscopy, 5 : 117-126, 1999.
- 6) Chang-Sheng LU, Kenji KASHIMA, Tsutomu DAA, Shigeo YOKOYAMA, Shigetaka YANAGISAWA, Iwao NAKAYAMA : Immunohistochemical study of the distribution of endogenous biotin and biotin-binding enzymes in ductal structures of salivary gland tumours, Journal of Oral Pathology and Medicine, 29 : 445-451, 2000.
- 7) Bi ZHANG, Masahiro MIURA, Rui-Cheng JI, Yuushi MATSUMOTO, Shigetaka YANAGISAWA, Seiji KATO : Structural Organization and Fine Distribution of Lymphatic Vessels in Periodontal Tissues of the Rat and Monkey : A Histochemical Study, Okajimas Folia Anatomica Japonica, 77 (4) : 93-108, 2000.
- 8) N. Natsume, T. Kawai, G. Kohama, T. Teshima, S. Kochi, Y. Ohashi, S. Enomoto, M. Ishii, T. Shigematsu, Y. Nakano, M. Kogo, Y. Yoshimura, M. Ohishi, N. Nakamura, T. Katsuki, M. Goto, M. Shimizu, S. Yanagisawa, T. Mimura, H. Sunakawa : Incidence of cleft lip or palate in 303738 Japanese babies born between 1994 and 1995, British Jour-

nal of Oral & Maxillofacial Surgery, 38 : 605-607, 2000.

- 9) Kenji Kawano, Toshiro Kanda, Kimihiko Hirano, Hideyuki Goto, Harumi Mizuki, Shigetaka Yanagisawa : Correlation between Thymidylate Synthase Expression and Histological Response to UFT in Oral Squamous Cell Carcinomas, ORAL ONCOLOGY Proceedings of International Congress on Oral Cancer April 2001, The Hague, THE NETHERLANDS, Vol.7 : 495-498, 2001.
- 10) Kenji Kawano, Harumi Mizuki, Hiromu Mori, Shigetaka Yanagisawa. Mandibular Arteriovenous Malformation Treated by Transvenous Coil Embolization : A long-Term Follow-up With Special Reference to Bone Regeneration, Journal of Oral and Maxillofacial Surgery, 59 : 326-330.

(7) 高度先進医療開発研究の現状

下顎切除後の骨延長による顎再建、インプラント義歯症例の結果が得られた。論文投稿準備中であり、申請を予定している。

※今後の課題と改善策

3. 診療の現状と評価

(1) 診療の目標

口腔機能の維持と回復を目指し、特に以下に重点をおいている。

- 1) 有病者（HIV等感染者、心疾患患者、臓器移植前患者等）の歯科診療
- 2) 口腔領域全般の疾患の治療と臨床教育
- 3) 唇顎口蓋裂、術前治療の改良と手術術式の改善
- 4) 口腔癌治療成績の改善、予知的化学療法とTailored治療
- 5) 顎骨再建と咬合再獲得、Distraction osteogenesisによる腭骨移植での下顎再建
- 6) インプラント義歯

(2) 診療実績（平成9年度－12年度）

区 分	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度
外 来 患 者 数	10,972人	9,886人	9,660人	8,797人
初 診 患 者 数	1,702人	1,583人	1,654人	1,571人
紹 介 患 者 数	994人	728人	788人	739人
入 院 患 者 数	3,680人	3,790人	4,181人	4,147人
平 均 在 院 日 数	21.6日	19.6日	18.4日	17.3日
平均病床稼働率	100.8%	103.8%	114.2%	113.6%
死 亡 退 院 率	2.3%	0.5%	1.9%	0.9%
剖 検 率	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

(3) 特殊検査・手術症例等

- 1) 骨延長治療
- 2) 歯科インプラント
- 3) 摂食嚥下リハビリテーション 構音機能検査
- 4) 顎運動分析装置

(4) 特殊専門外来

唇顎口蓋裂および言語治療

(5) 高度先進医療・先端医療の導入

骨延長と歯科インプラント

※今後の課題と改善策

- ・感染症患者用の専用治療スペースが不可欠である。

4. 国際交流について（平成9年度～12年度）

(1) 国際医療協力体制

NGOの口蓋裂協会が行っている発展途上国への唇顎口蓋裂手術援助を検討している。早ければ年内にチームの派遣を考えている。

(2) 留学（長期外国出張）

1) カリフォルニア大学サンフランシスコ校（アメリカ合衆国）

平成8年9月～平成9年10月 1名

2) ルーベンス大学及びアントワープシティ病院（ベルギー）

平成12年4月～6月 1名

(3) 外国出張（国際学会活動など）

1) 平成9年

13th International Conference on Oral and Maxillofacial Surgery,

第42回日本口腔外科学会総会

5人 日本国

75th General Session of the International Association for Dental Research

1人 アメリカ合衆国

2) 平成10年

第2回国際顎顔面外科学会

3人 オーストリア

3) 平成11年

第14回国際口腔顎顔面外科学会

3人 アメリカ合衆国

The 4th Asian Pacific Cleft Lip & Palate Conference Committee

4人 日本国

4) 平成12年

第1回口蓋裂による裂奇形国際会議

2人 スイス

(4) 外国人研究者の受け入れ状況

年 度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度
目 的	研修、研究	研 究	研 究	研 究
受 入 人 数	3名	3名	3名	2名
出 身 国 名	中国、 アルゼンチン	中 国	中 国	中 国
滞 在 期 間				
費 用 負 担	国費1、 私1、県1	国費1、私	国費2、私2	国費1、私1

※今後の課題と改善策

- ・来日前の日本語教育が望まれる。

5. 国内学会や研究会の開催（平成9年度～12年度）

診療科で担当した地方学会・研究会、全国規模の学会・研究会

学 会 等 の 名 称	開催期日	参加人員	発表形式	その他
九州口腔癌治療法研究会	1998年8月21日	130名	口 演	

※今後の課題と改善策

・特になし

6. 地域との関わり

診療科で担当した大分県内の研修会、研究会について

研 修 会 等 の 名 称	開催頻度	参加人員	発表形式	認定医資格継続適合の有無
大分顎変形症研究会	年2回	40～50名	口 演	無

※今後の課題と改善策

・地場産業と協力してCT画像から光重合レジンによるプラスチック模型作製の為に専門的知識で協力、市場でのシェア拡大に貢献した。

7. 診療科の特色

歯科治療全般と口腔外科外科疾患の治療と教育、顎口腔領域の専門医養成とその医療を荷っている。

8. 将来展望

- 1) 唇顎口蓋裂や顎変形症などの治療センターとして病診連携を強化して、より良い医療を行いたい。
- 2) 口腔腫瘍切除の機能障害を改善すべく努力しているが、困難が多い。リハビリ部門を飛躍的に発展させる必要がある。